

誘拐

そのアラビア式の香炉は、大層簡素なもので木製の台の上側を銀色のブリキでカバーしただけのものだった。上の四隅は角のように尖りブリキが銀色に輝いている。軽くニスが塗られた四つの側面には、ヤシの木の下に交差する二本の剣をあしらったサウジの紋章が貼り付けられていて、鈍い金色の光を放っていた。

香炉では、炭が赤く燃えていた。炭の上には香木が載せられ、香木からは、青白い煙がゆらゆらと立ち上っている。周囲には心地よい香りが漂よい始めていた。

芳香の中、その青白い煙をじっと見つめていると、慎太郎には幽玄の世界に迷い込んでしまうような気がしていた。慎太郎がサウジアラビアの三友商事リヤド支店に赴任してから既に半年以上は過ぎていたが、こんな気持ちになったのは初めてのことだった。

その晩は、アリ石油相が東京から来た石渡専務達を招き、リヤド郊外の沙漠で晚餐会を開いてくれていた。

着いた時にはまだ陽が残っていたが、今は完全に陽が落ちて僅かばかりの外灯が周囲を照らしているだけだった。慎太郎は沙漠のパーティーと聞いていたが、ここはいわゆる沙漠では無かった。ところどころ草も生えた土漠だった。そこにテントが張られ、晚餐前の茶会が始まるうとしていた。

慎太郎は、アリ石油相を目の前にして幾分緊張はしていたが、香木の香りにも助けられたのか自分でも不思議なほどリラックスしていた。テントの中に充満してきたその香りは、僅かな酸味を持ち甘美この上なく崇高ささえ感じさせるものだった。賓客用の希少な香木が焚かれたに違い無い。

慎太郎は、まず、ゆったりとそのアラブ特有のもてなしを味わうことにした。今夜はアリ石油相の招待を心底楽しまなければならぬ、ここはサウジアラビアだし・・・と繰り返し自分に言い聞かせてもいた。

しかし、それにしても、この香りはどこかで嗅いだことがあると、慎太郎は、ふと気付き、それがどこであったか、を懸命に思い出そうとしていた。

懐かしい匂いだった。

すぐに思い出せなかったのは、それが、中東ではなく、自分が学生時代を過ごした京都のことだったからだ。

その香りはお寺を訪問した時に嗅いだものだった。そして、暗いお堂の奥で金色に輝く仏像の姿が目に見え、エコーのかかった、息長くリズム感に満ちた読経の声、木魚、鐘の響きも耳の底に蘇った。それが、何故か慎太郎にこの国の強い宗教性を意識させていた。

慎太郎は外交官時代、英語のキャリアだった。今日はたまたまリヤドの日本大使館に勤務している同期のアラビア語キャリアである林公使も同席してくれていた。林にしてみれば、同期のよしみということもあるが、相手が大臣だから願っても無い外交上の好機でもあった。慎太郎にしてみれば、

政府高官が一緒に箱が付くというものだった。三友商事からは慎太郎、石渡専務の他にその御付き二人、それにアルコバール支店の南の計五人が同席していた。

もくもくと煙の立ち込めるテントの中には、サウジ側からアリの側近など一〇人程が同席していたが、プリンスのアドルラフマン次官の姿はなかった。そのため今晚の晩餐会で一気に話がまとまるようなことは無いと言えた。

東京からの出張者はともかく、アラブのことを熟知している慎太郎は、何事も一晩で決まるわけではないと最初から高をくくっていた。

慎太郎の前にはドイツ(ナツメヤシ)とアラビアン・コーヒーが出された。彼は、この組み合わせが大変気に入っていた。アラビアン・コーヒーは、ぐい飲みの猪口(ちょこ)程度の湯呑(のみ)で少量出てくるだけだが、飲むといつまでも口の中に芳しい香りが残った。サウジの民族衣装である白いトープ服に刺繍を施してあるベストを羽織った給仕がやってきて何杯でも勧める。

慎太郎はこの味が好きだったので三杯も飲んでしまった。そしてその後アラブの作法通り湯呑みを軽く左右に傾けてお代わりのいらぬことを示した。給仕は慎太郎のその仕草を見ると、にやりと笑ってお代わりを注がずにその湯呑みを持ち去った。

サウジではいつも晚餐の前にこのようにお茶を飲みながら歓談するのが恒例だ。晚餐もそうだが、特に挨拶があるわけでもなく、皆、テントの壁に沿って置かれた椅子に腰をかけ、思い思いに話をしている。

鼠地に緑色の細縞の入ったトープ服に身を包んだアリ石油相は穏やかな顔で慎太郎の同期の林とアラビア語で話をしていた。

その隣には、慎太郎の上司に当たる石渡が座っていた。

石渡は小太りの体に高価な濃紺の背広を着込み、脂ぎったその丸顔にはやはり高価な鼈甲(べっこう)の眼がねをかけていた。

その眼がねの下から、石渡は、林と話をしている大臣の顔を窺っていた。彼はアラビア語が解らないはずだが、にこにこと愛想笑いを浮かべていた。

すると、いきなりアリが石渡に英語で話しかけた。

「ところで、ミスター・イシワタリ・・・、我が国は、現在、日量約一〇〇〇万バレルの石油を生産しているが、近いうちに日量一二五〇万バレル、そしてその後はゆっくりと一五〇〇万バレルの生産が出来るようにするつもりだ。さらに、二〇〇〇万バレルの生産を行えるようにする計画も持っている」

石渡は、その唐突な話しかけ、初めて耳にする膨大な生産見通しに当惑してアリの顔をまじまじと見つめた。

そして、アリはサウジの国営石油会社であるアラムコに長年勤めていたことがあり石油産業には精通している筈だし、頭脳明晰(ず)のうめいせき(で)であることも十分に承知していたから、おかしいなことをいうことはない、そう考えていた。

「閣下。それは誠に有難いことです。世界は貴国に期待して
います。もちろん、我が国、そして弊社もそうです」

石渡はアリの真意を量りかねたが、取り敢えず無難にそう
応じた。

アリは、満面に笑みを浮かべ、石渡の答えに頷いていた。

「どうかね。 ミスター・イケナミ」

今度は、慎太郎の方を向いて、得意げに語りかけた。

今回の会合は慎太郎の努力で実現したもので、アリは慎太
郎の名前を良く知っていた。このような個人的な繋がりにはサ
ウジアラビアでは、ことさら重要なことだった。

アリは、当然のように、慎太郎から石渡同様の賛辞が出る
のを待っていた。

慎太郎は、アリから発言を求められたことが殊の外嬉しか
った。この好機に気の利いたことを言ってアリの関心を惹こ
うと最初から思っていたので、平凡な応えを思い止まり、思
い切ってその膨大な生産計画の意味するところを突いてみ

ることにした。

「閣下。それは本当に有難いことだと思えます。しかしながら、閣下、仮に日量一五〇〇万バレルのペースで生産を続けると、一カ月で四億五〇〇〇万バレル、一年間でおよそ五四億バレルになります。日量二〇〇〇万バレルですと、一カ月で六億バレル、一年間で七三億バレルとなります……」

と慎太郎は応えた。

全く予期しなかった慎太郎の応えにアリの顔からは微笑みが消えた。そして、アリは驚いたように目を見張り慎太郎の顔をじっと見据えた。

石渡は慎太郎の応えを聞いて驚いた。その意味するところを直ぐに察したからだ。

そして、アリの機嫌を損ねてはいけないと、慌てて額に汗を滲ませながら口をはさんだ。

「君、それは計算すればすぐに分かる、当然のことではないか……」

しかし、アリは石渡の発言を遮るように言った。アリの目がきらりと光った。

「本当かね？」

慎太郎は、しめたと思った。とにかくアリの関心と呼ばれたことを喜び、アリの次の反応を待った。一か八かの大(おお)勝負だった。

そして、アリの機嫌を損ねないようにとただひたすら祈っていた。

アリが言った目標数値は部下たちがアリに伝えたもので十分に信頼すべきものであり、世界最大の原油埋蔵量を誇るこの国では当然のことと考え、慎太郎の言ったことは計算すれば簡単に分かることだが、計算する気にもならなかったに違いない。

アリはすぐに気を取り直すと、

「私の言った計画通りに生産を続けて行けば、一〇数年で我

が国の現在確認されている原油埋蔵量の三分の一ほどを生産してしまうことになる。君はそう言いたいのだね」

と言った。

賢明なアリは、お互い専門家同士であることは十分に承知していたから、細かな埋蔵量の定義から議論するつもりはなかったし、それは互いの眼と眼で十分に分かっていた。

慎太郎も、今後、膨大な埋蔵量の追加があると見ていたから、現在の確認埋蔵量のみで考えるべきでないことは分かっていた。

増産計画が膨大な埋蔵資源を相当に減耗させてしまうことを、慎太郎が具体的により正確に理解していることを示したかっただけだった。

すかさず慎太郎は応えた。

「そのとおりです。閣下」

石渡は、思わぬ展開に動転して、慎太郎とアリの顔を交互に何度も見比べながら、慎太郎にはこれ以上何も言うなというような目配せをした。その顔には、さらにどっと汗が噴出

していた。そして、恐る恐るアリの顔色を窺っていた。

幸い、アリは、怒るでもなく、平静に見えた。

そして、ニコニコと笑いながら、

「君はなかなか面白い。良かったら、来週一五日の火曜日に石油省に遊びにこないか。待っているよ」

そう言うと、アリは皆に野外の宴席へと向かうよう呼びかけた。

慎太郎は、アリの反応にホッとしていた。助かったと思った。それどころかアリが慎太郎に好感を持つてくれたようで石油省に呼んでくれた。それは大勝負をした慎太郎にとって殊の外嬉しいことだった。アリの度量の大きさ、頭の良さは慎太郎が思っていた通りだった。

そして、石渡と言えば、思わぬ展開に、今度は喜色満面になっっていた。

ちょうど、その頃、ポール・ダグラスは、リヤド中心部にあるサウジと米国の合弁会社を出て、リヤド郊外にあるアリ

ゾナ・コンパウンドの自宅に向かっていた。

ポールはリヤドに来てから既に二〇年が過ぎていた。

彼の扱っているF一五戦闘機はサウジ政府に好評で航空国防省では七二機購入してくれていた。

このプロジェクトは一兆円弱と言われている大きなもので慎太郎の会社では全く手の届かない代物だった。F一五戦闘機は一機で七〇〇億円はするから武器、備品を入れれば一兆円は納得のゆく額だろう。

このプロジェクトを取り仕切っているポールはサウジにおける重要人物だった。

ポールの乗ったリンカーンはアーク灯に照らされて昼間のように明るい幹線道路を出て薄暗い脇道に入った。

暫く走ったところで、突然行く手を遮るよう一台のランドクルーザーが現れた。

「危ない！」

と叫び、フィリピン人運転手のマルコスが急ブレーキをかけると、リンカーンはタイヤを軋ませ急停車した。

ランドクルーザーからは機関銃を持った黒覆面の男達が数人飛び出して来た。後部座席に座っていたポールは急ブレーキで体のバランスを崩されたが、すぐに立ち直った。

「テロリストか」

ポールは、叫んだ。

運転手のマルコスは、素早く、タイヤを軋ませながら、バツクをして逃げようとしたが、後ろにも、もう一台ランドクルーザーが現れてその行く手を遮った。

マルコスは全身を震わせながら、

「サー、許して下さい」

と言うと運転席のドアを開けて必死で逃げ出した。

しかし、近づいて来たテロリストが、マルコスがムスリムでないことを確認して銃撃するまではほんの一瞬のことだった。マルコスは血しぶきを上げて、どっとその場に倒れた。悲鳴を上げる間もない即死状態だった。飛散したマルコスの

真赤な血がポールの目の前の防弾ガラスに点々とこびり付いた。

ポールは、手にした携帯電話のダイヤルを回す余裕も無く、その血の付いた防弾ガラスのほんの手前まであつという間に近づいて来た男達の姿を、ただ呆然とみつめていた。

男達は、開け放たれた運転席のドアから手を入れ後部座席のロツクを開けるとポールに銃口を突きつけた。

「観念して我々に従え」

流暢な英語が聞こえた。

ポールは、もうすぐそこに見えているコンパウンドの塀を口惜しそうに見つめながら、男達が彼に目隠しをし猿ぐつわをかけるのに任せていた。

男達は彼を連れ、足早に二台のランドクルーザーに分乗すると、リンカーンと血の海の中に横たわっているマルコスの死体を置き去りにして車を急発進させた。

「アラーフ・アフバル(アラアは偉大なり)」

「ライラハ・イララ・モハンマド・ラスルーラ(マホメットは最後の預言者)」

車の中では、覆面の男達が口々にそう唱えるのが聞こえた。ポールは、頭の中で彼等はアルカイダのサウジ支部である“沙漠のサソリ”に違いないと悔しい思いで反芻(はんすつ)していた。

そして、これから自分はどうなるのか、どうして彼等は自分を射殺しなかったのかなどと考えていた。

再び、アリ石油相のパーティー会場

慎太郎が、お茶会用のテントを出ると、広場には煌々と明かりの灯った宴席が用意されていた。バイキングスタイルに並べられたテーブルには、サウジ料理だけではなく、フランス料理、イタリア料理、そして中華料理、さらに慎太郎達に気を使ったのだろう、鮎まで用意されていた。大変豪華なものだった。

慎太郎は、これらのサービスを取り仕切っているタキシ

ドの人物がこちらを見て微笑んでいるのに気がついた。良くみると、知り合いのアル・ファイサリア・ホテルの副支配人だった。これで、この豪華な料理が一流ホテルからのケーキタリングであることが分かった。

皆が順番に思い思いの料理を取り席に着いた途端に灯りが消え真つ暗闇になった。

慎太郎は何事が起こったのかと身構えたが、単なる停電のようだった。目が慣れて来ると、月も出ていて真つ暗闇ではなかったが食事をするには暗すぎた。

日本なら、このような大失態を演じると大変なことになる。大臣は烈火のように責任者を怒鳴りつけたことだろう。

「ロマンチックな夜になった。ちょっと暗いがディナーを楽しもうではないか」

とアリが言った。皆の間の緊張が一瞬にして緩んだ。

やがて、会場の周囲に沢山の車が並び、一斉にそのヘッド

ライトが点された。

豪華な晚餐がヘッドライトの明るい光に見事に浮かんだ。すると、誰からともなく拍手喝采が始まった。アリと石渡が笑顔で乾杯するのが見えた。

その後、晚餐会は何事もなかったかのように淡々と続いた。慎太郎は、その一部始終を見て、アリの人柄、そして、サウジの臨機応変の対応振りには舌を巻いた。

長い宴席の後に、慎太郎が自宅のアル・ファイサリア・レジデンスに戻ったのは真夜中だった。

来週火曜日にはアリが会ってくれる。その期待に胸を膨らませながら慎太郎はベッドに入った。

翌日は、リヤド支店の笠原、アルコール支店の南が石渡一行をリヤド見物に連れて行くことになった。リヤド見物と言っても見るものはそれほどなかったが、サウド家発祥の地デライヤ遺跡、国立博物館などはお決まりのコースになって

いた。それに、郊外の赤い沙漠、最近若者達の間で盛んになってきているサンドバギーを楽しむ沙漠スポットなども見所になっている。後は、ファイサリア・レジデンスに隣接するファイサリア・タワーもしくはキングダム・タワーからの展望などがある。両タワーの下にあるショッピング・モールも土産買いなどもあり良く連れて行くところだった。

慎太郎と佐々木支店長は、夕食の際に参加するだけで良いことになっていた。夕食はファイサリア・レジデンスに隣接したファイサリア・タワーの展望レストランでとることになっていたので、慎太郎には便利だった。

夕食の時、石渡は、展望レストランからの眺めに見とれていた。足元から天井まで総ガラス張りのグローブと言われるレストランからは、リヤドの街並みが一望出来た。夕陽が沈み、満天の星が現れると又格別だった。地上一面の家々の明かりは、まるで星のようにきらきらと輝き、外気が暑いせいか揺れて見えた。

「池波君、この夜景は素晴らしいね。曇りの日もほとんど無いようだから、君は見る気になればこれを毎日見られるのか。羨ましいよ」

石渡は上機嫌だった。

「専務、確かに毎日上つても飽きない景色ですが、結構、おつくうで毎日というわけには行きません。それに、雲が出るということは滅多にありませんが季節によると砂漠から砂が風に運ばれて来て視界不良となることもあります。この展望レストランは大丈夫ですが、風が強い時に屋外の展望台に出るとしんどいですよ」

慎太郎は、レストランの自慢のフォアグラのソテーを食べながら応えた。

「そうかね。そうすると、今日は風も無く幸運だったということになるのかな」

「そうです。まあ、その確率は九〇%以上ですけど」

石渡は慎太郎の説明を笑いながら楽しそうに聞いていた。

石渡は慎太郎のリヤドの生活を心配していたが、実際にその

目で確かめて少し安心したようだった。

石渡は、佐々木と慎太郎に気を使い後はホテルに戻るだけだから今日はここで別れようと言ってくれた。

別れ際、慎太郎が、翌日、林公使が一行を中華料理の晚餐に招いてくれることになったと石渡に告げると石渡は光栄なことだなどと言って上機嫌だった。林は、林で三友商事の幹部からエネルギー問題のレクチャーを受けるのが楽しみだと慎太郎に言ってくれていた。

慎太郎は、石渡の出張が順調に進んでいることにホッとしていた。